

土木の神様と呼ばれた

加藤清正公



よしむら かずなり
吉村 和就

グローバルウオータ・ジャパン 代表
(国連テクニカルアドバイザー)
麻布大学客員教授

七月半ばに熊本本の崇城大学で講演、タイトルは「水ビジネス・110兆円の攻防」講堂は四百名を超える学部学生や社会人学生で満席であった。熊本には以前から深い興味を持っていた。一つは熊本市は日本で最大の地下水使用都市であり、周辺市町村を含め百万人以上が、阿蘇の地下水の恩恵を受けている。熊本の水はおいしい、阿蘇に降った雨水が、約二十年の歳月をかけ阿蘇の溶岩流に浸透する間に適切なミネラル分を含み、これが熊本の水道水源となっている。

もう一つの興味は熊本城である。加藤清正は朝鮮出兵で明・朝鮮連合軍を相手に戦ったが「泥水をすすり、死馬の肉を喰らう」という籠城戦(ろうじょうせん)を体験した。その経験から熊本城の築城に当たり籠城への備えを万全にした。大量の米や味噌、海草の干物を櫓に備えると共に、特に水の確保に力を入れた。この為に熊本城内に百二十以上の井戸を掘ったという、この井戸も見てみたかった。

土木の神様

加藤清正と言えば、多くの人は、「賤ヶ岳(しずがたけ)の七本槍」の一人に数えられた槍の名手で、朝鮮出兵では「清正の虎退治」を思い出すだろう。秀吉の家臣団の中では体も大きく武功派の武将として知られていたが、その一方で治水、干拓、城作りの技術に優れ「土木の神様」とか「城作りの天才」ともいわれている。現代的に言えば、加藤清正は城を中心にした都市計画の天才でもあった。天正十六年(一五八八年)肥後二十五万石の領主に命じられた清正は、根本的な都市計画を実施した。外敵からの侵入を防ぐために河川の改修(毎年氾濫を繰り返す坪井川と白川の切り離し)、湿地帯を内壕にし、高台は人が居住できるように居住地の開発、低地では新田開発を促進した。また整備した坪井川を水運に利用し、城下町の物資輸送を盛んにし、城下町の繁栄をもたらした。農業用水路の整備にも力を注いだ。火山の噴火活動でできた阿蘇の土地は、水がすぐ地下に浸透してしまう、清正は白川から大量の農業用水を引くために、堰や用水路を数多く整備した。その中で特筆できるのが「鼻ぐり井手」で清正の独創的な水利技術である。井手とは用水路のことで、水量を調節する為に水路を壁で仕切る必要があるが、壁で仕切ると、阿蘇特有の火山灰土(ヨナ)が沈澱してしまう、壁の底部中央に孔(鼻ぐり)を開け、底の水流を早く、しかも水流に回転を与えヨナが底部に溜まることを防ぐ技術である。長期に渡る維持管理方法まで考えられた用水路の開発で、今でも「鼻ぐり井手」は市内菊陽町地区の水

田を潤している。

領主となった清正が陣頭指揮して進められた白川、菊池川、球磨川、緑川の河川改修により開墾された新田は約二万四千町歩に達し、その後の肥後の国に繁栄をもたらしている。

城作りの天才

熊本城の築城（一六〇一年～一六〇七年）に当たっては、清正の百五十回以上の城攻めの実戦経験が生かされている。通常は、城の周りに外堀、内堀を構築するが、清正は坪井川を改修し豊富な流れで城を囲んだ。石垣の石の大きさと積み重ね方を構築物により変化させ、敵が簡単に登れないようにしている。もちろん「武者返し」と呼ばれる熊本城の石垣の構築は幅や奥行き、高さも過去最大であった。城内のリスク管理も徹底していた。仮に敵が城内に侵入した時には、暗がりの地下通路からしか城に入れない構造（封鎖し易い）や、本丸御殿への隠れ道（秘密通路）を複数設けるなど、実戦経験を十二分に生かした城作りを成し遂げている。これらの築城のノウハウは、全国各地の城作りのモデルとなった。

徳川家康は名古屋城の築城にあたり、最も高度な技術を要する天守閣の石垣構築を加藤清正に命じている。清正は城作りに当たり徹底的に地形条件や地盤調査を実行している。

熊本城内の百二十以上の井戸は、城作りに当たり徹底した地盤調査（ボーリング調査）でもあったのではないとも言われている。

海外貿易で経済振興

清正がいかに優秀な城主であったとしても、巨額な城作りの工事費用をどのように捻出していたのであろうか。肥後二十五万石とは言え、その内七万石は秀吉の直轄領であり、年貢を課することが出来なかった。熊本に入国する以前、清正は、当時の世界貿易港である境にいて貿易の実務を習得した。熊本で収穫された小麦は海外に輸出され、武器作りに必要な硝石や鉛に替えられ日本に輸入された。さらにそれらの貿易品は京都に送られ莫大な利益となった。

また慶長六年には清正は関ヶ原の功績により小西行長の旧領を得て肥後五十二万石（のちに加禄二万石）を拝領している。

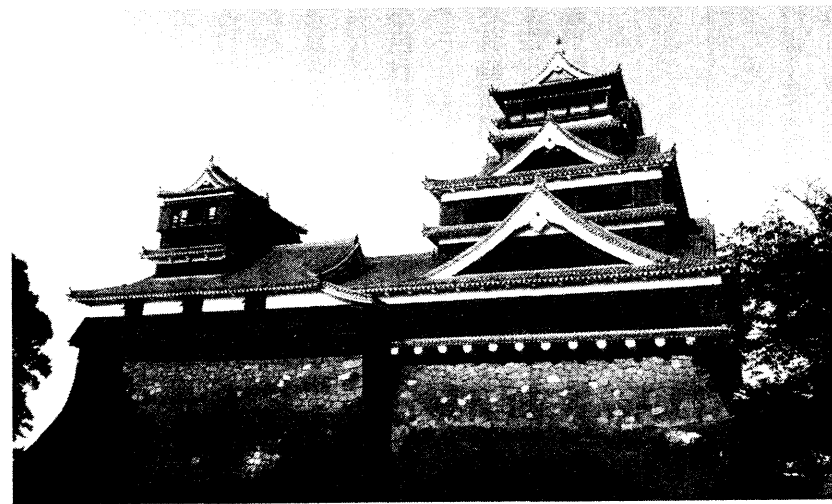
四十五年間続いた加藤家が改易（所領没収）され細川忠利が肥後に入国することになった。細川忠利が入国する前に禄高を調査したところ、実際は五十四万石ではなく、七十五万石あったので狂喜乱舞したとも伝えられている。熊本城を作り、肥後の経済を支えたのは、清正の海外貿易の才覚であった。

人材登用の神様

多くの大事業を成し遂げた加藤清正。ではどのようにしてこれらの偉業を成し遂げたのか、そのカギは人材登用にある。重用した家臣の一人「飯田覚兵衛（直景）」は若いころ

から清正に仕え、武勇に優れ、常に戦いにおいて先鋒として活躍した。覚兵衛は槍の名手だが、戦において味方の犠牲を少なくする戦法を編み出している。例えば朝鮮出兵の際には、森本一久と共に亀甲車（城の上から射られる矢や投げつけられる石を防ぐ車）、いまで言う装甲車を作り、二度目の普州城攻撃の際には一番乗りを果たしている。覚兵衛は、また土木のテクノクラート（技術官僚）としても、その才能を発揮している。城作りの為の地盤調査、河川改修、近江の国から優秀な石工を招き、肥後の国に住まわせ厚遇し、城壁は勿論のこと、堤防、水路、石橋作りに従事させた。

鉄筋とセメントの無い時代、彼らの石垣技術が先端技術であったのだ。彼らのノウハウは肥後の石工技術として全国に広がり、多くのアーチ式石橋を完成させている。もちろん覚兵衛は土木工事に関わる現場の人間を大切にしていた。では主君清正と覚兵衛と



熊本城天守閣 平成23年7月筆者撮影

の主従関係はどうであったのか。加藤家が改易され、京都に隠居した覚兵衛は「私の一生は、加藤清正に騙され続けられた」と語っている。その言葉とは裏腹に「苦しい戦いに勝利した時、また難工事を完成させた時など、主君清正は常に、その都度功績を称えてくれた。その主君の言葉を聞きたいが為に、自分は全知全能を掛けて職務を遂行してきた」と心情を語っている。まさに主君と一心同体で、強い信頼関係で肥後の国を治めてきたのである。

さらに貿易による地域経済の振興は、肥後の学僧であった下津棒庵を貿易の外務担当として重用し、物資の交換に当たり内外の市場調査を徹底させた。特に下津棒庵は大阪、京都に強い人脈を持ち、清正は大きなビジネスを下津棒庵に任せ、肥後の経済発展の基礎を築かせたのであった。ここにも主君と貿易テクノクラートとの強い信頼関係がうかがわれる。

清正公

加藤清正は、単に武勇に優れるだけではなく、経済人として自ら努力し、また能力のある人材を徹底的に登用し大きな国を築き上げたのである。熊本市内には清正公を称える歴史上の建造物が数多く見られる。四百年の歳月を超えても今なお人々に愛される名君である。

今度発足した「ドジョウ内閣」にも学んでほしい歴史上の人物像の一つが「加藤清正公」であろう。